

強制動員真相究明

ネットワークニュース No.4 2011年5月4日

編集・発行：強制動員真相究明ネットワーク

(共同代表/上杉聡、内海愛子、飛田雄一、事務局長/小林久公)

〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内

ホームページ：<http://www.ksyc.jp/sinsou-net/> E-mail：q-ko@sea.plala.or.jp (小林)

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 (飛田)

郵便振替<00930-9-297182 真相究明ネット>

東北大震災の被災者の方々に心よりお見舞い申し上げます。

強制動員真相究明ネットワークは昨年5月に事務局長の福留範昭さんが亡くなられ大きな打撃を受けていますが、活動を継続しています。新しい事務局長には札幌の小林久公が就任しました。韓国の日帝強占下強制動員被害真相究明委員会は「対日抗戦期強制動員被害調査および国外強制動員犠牲者等支援委員会」に改編され活動を継続しています。

久々のニュースになってしまいましたがお送りします。事務局の引き継ぎが必ずしもスムーズに行われている訳ではありません。ニュースの発送もれがあるかも知れません。お気づきの点がありましたら事務局までご連絡ください。また会費を徴収いたします。2011年4月から1年分の会費として個人3000円、団体5000円をご送金くだされば幸いです。詳細は、本ニュース最終頁をご覧ください。(飛田)



父の足跡を探す、北海道平取町



日本の従兄弟・甥っ子さんと朴進夫さん

強制動員真相究明全国研究集会・「日本の朝鮮植民地支配と強制連行」

日時：日時：2011年5月28日(土)午後2時
～29日(日)午後5時

場所：神戸学生青年センター TEL 078-851-2760 <http://ksyc.jp/map.html>
(阪急六甲下車徒歩3分、JR六甲道下車徒歩10分)

プログラム

< 5月28日(土) >

14:00～14:30 開会行事

14:30～18:00 研究発表

- 1) 「総動員計画と強制連行」(仮題) 庵逄由香
 - 2) 「戦時体制期韓半島内人的動員(労務動員)被害～死亡者現況を中心として～」
鄭惠瓊(韓国・日帝強制動員&平和研究会会創立準備委員、歴史学博士)
- 18:30～21:00 懇親会(参加費：一般4000円、学生2000円)

< 5月29日(日) >

09:30～12:00 研究発表

3) 「鉄鋼統制会の名簿(1945.8.15)から」 塚崎昌之

4) 「被朝鮮人連行者の賃金問題」 守屋敬彦

13:30～15:00 研究発表

5) 「朝鮮農村からの強制連行」 樋口雄一

15:30～17:00 総括討議

参加費 1000円

(宿泊、神戸学生青年センター相部屋は2900円)

主催・問合せ・申込先：強制動員真相究明ネットワーク

(共同代表・飛田雄一、上杉聡、内海愛子)

〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878

ホームページ <http://www.ksyc.jp/sinsou-net/>

(事務局長・小林久公 E-mail: q-ko@sea.plala.or.jp)



福留範昭さんはもうおられない。が、 川瀬俊治（事務局員）



2007年、真相究明ネット集会での福留さん

悲劇はいつも突然やってくる。想像だにしていなからだ。強制動員真相究明ネットワーク事務局長福留範昭さんが5月5日未明、急性心不全で亡くなられたのもそうだ。とても信じられない。まだ60歳で、仕事に一番あぶらがのられていた。

九州に行くとき必ずお会いして話し込んだ。昨年6月、北九州で開かれた日韓の歴史研究交流でも下準備をされ、成功に導かれた。その仕事ぶりに、参加した私はそばから敬服して見ていた。韓国語がよくできて、うらやましい限りだった。10年間韓国で研究生活をされ韓国啓明大での日本語教員を務められた。崔吉城さんの『韓国のシャーマン』（国文社、1984年）を翻訳された韓国宗教研究のエキスパートでもあったが、そのことはおくびにも出されなかった。

昨年10月の沖浦和光先生を中心として大学同僚の研修で博多に行き、時間を惜しんで博多でお会いした。それが最後になる。昼食とコーヒーを飲み、「九州に来たんだから」とごちそうを供された。

研究者としての福留さんは知らない。ただ2、3年ほど前に解放出版社の仕事もあり広島修道大学を沖浦先生らと訪れたことがある。共同研究室に通されて江嶋修作さんにはお会いして、そのあと広島の三良坂に学生たちとごいっしょした。ちょうど、いまの時期だ。その時に福留さんがおられたかは定かではない。

研究者生活のあと広島での日韓の市民運動体の交流の要としても活躍された。私を知る部落解放運動のメンバーを知っておられ、親近感がいっそう増した。

昨年、韓国の市民運動を紹介する『ろうそくデモを越えて 韓国社会はどこに行くのか』（東方出版）という本を文京洙立命館大学教授と企画し、福留さんから「韓国における過去の清算」という原稿をいただいた。共同執筆者として何度かメールや電話でやりとした。原稿は簡潔にまとめられ、文劈頭に文章全体をまとめる簡単な紹介文も福留さんに書いていただいた。この短い文は長らく韓国におられ、そして戦後補償問題に慧眼をおもちでないと草せない。何よりも韓国人の心を知らないと言けない一文だった。本当は編者が担当すべき文だったが、代行していただいて本当によかった。

今年8月に博多の花房さん宅で日本軍慰安婦問題取り組みの拡大全国会議があり私も参加した。会議が始まる前に小林さんらと福留さん宅にお悔やみに赴いた。急な坂道を登ると木々に囲まれたマンションがあり、その1室に福留さんの遺影がおかれていた。なぜか、この部屋は鳥たちの声がよく聞こえるのでは、という思いにとらわれた。緑深い木立に囲まれた住まいということだけで沸き上がった思いではなく、窓外から聞こえる鳥たちのさえずりが福留さんのあの少し上顎をあげはにかみながら

笑う姿に重なったからだ。それは不遜でもなく自然に心を領した面影の再現だったと思う。

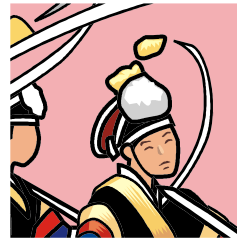
遺影は相当前の写真だと思ったが、4、5年前のものだと、妻の福留留美さんがおっしゃった。甲斐に訪れたメンバーは一様に驚いた。いや、そうではない。福留さんはそれだけ若くして逝かれたのだ。5月5日はなんとという残酷な日だったのか。

灼熱の真夏の1日が、ここではウソのように別世界を形創っていた。さぞかし福留さんが気に入られ、終(つい)の住みかと考えられていただろうにと、あらためて無念さを感じざるをえなかった。

悲しみを越えることなど愛情く思う人ほど無理なことだと思う。しかし、その亡き人の生き方を、願い、思いを、自身の中に取り入れることができれば、少しは悲しみが癒される。親

しいものとの、方々との別れを繰り返してきた私がたどり着いた心の諸相だ。しかし、もろもろの心の相は、ときとして悲しみに打ちひしがれることもあるし、酒量が増すこともある。しかし福留さんは確実に未来を見据えておられたから、凡夫のわれわれにはその思いをともに追走することができる。先達を追慕するだけではなく、歩を先に進めることが、いまとなってはわれわれがあたりかぎりできる福留さんへの最大のメッセージに違いない。

合掌



福留ノリアキ！お前はなぜ逝った?! 誰に断りもなく…。上杉 聡

お前は、俺にとって「便利」なヤツだった。韓国がノ・ムヒョン政権となったあの年、市民運動はのぼり調子のきっかけをつかんだ。戦後補償の課題が、まず韓国から遺骨問題を先頭に日本へ届けられた。その間の事情を、韓国側の法律、新聞などを翻訳して、お前はつぶさに俺たちへ知らせてくれた。なんと便利なヤツ!! だけど、お前はもういない。

言葉ができるというのは大切。相手の事情を心の中までつかむ力があつた。いったい、どれだけその言外の翻訳力によって救われ、教えられたか…。真相究明ネットワークや遺骨連絡会は、お前がいなければできなかった。通訳するふりして組織化を進めやがった。

でも、お前の言語力は、日本語の方は低かったよ。もしかして韓国語も下手だったのかも…。何しろ俺は韓国語が、からっきし駄目だったから、想像するしかない。ただ、お前がそばにいてくれたから、俺は韓国の友だちと、いつでも心ゆくまで話すことができる、という心のゆとりがあつた。いちいち通訳を頼むのは大変なんよ。信頼できる通訳者は少ない。だけど、お前はもういない。

市民運動は、まるで幼稚園生から大学院生までのよう。力がばらばら。何も知らない幼稚園生が、大きな顔をして院生へくっついてかかる。はたで見ている俺は「バカッ!」と内心言いたいが、そこは立場上ぐっとこらえて、代わりにお前をバカにした。「お前は韓国語ができるけど、

日本語は知らんなー」「福岡は田舎じゃけー、こんな地下鉄カードは持っとらんじゃろう!？」俺の言葉に、お前は少しおどけて、漫才で応じてくれた。心やさしいヤツだった。

俺のライフワークの一つが部落問題 というより部落の歴史研究。戦後補償とはいつも股割り状態。「ボーゲンの上杉」と呼んでくれと俺は語った。そんな苦しみがここ2年間はピークに達した。『これでわかった! 部落の歴史』などというまがい物のような題の本を出したところ、「続きはまだか」という声がしきり、お前に断って2年間執筆に専念した。俺にも果たすべき責任があったんよ!

でも執筆は簡単ではない。去年の3月になってもまだできない。運動をサボっている俺は、たまたま会ったお前の顔が怖くて正視できなかった。お前はその時、『これでわかった! 部落の歴史』を全部読んだ。続きをがんばれ」と励ましてくれた。嬉しかったよーっ。それからもう一度、執筆に全力を挙げた。だけど間に合わず、お前は牡蠣(カキ)に殺された。

葬儀の場に置かれたお前の体に触った。足も探してみたが、服の上からはみつからなかったよ。きっと痩せこけていたのだろうな。どうして勝手に逝ってしまったのか。5月に牡蠣など食べるなよ。おれがそばにいたら止めたよな... だけど、もしかして一緒に食らって、俺も今ごろ天国だったかもなー。連休に重ならなかったら、お前は医者の手当てを十分やって貰えたのかなー。

俺の本が完成した夜、眠れず水ろうそくを一晩燃やしつづけた。「何でお前は逝った」と、天を見上げて過ごしたよ。お前と久しぶりの語らいの夜だったなあ。降りてこい! この地上へ。お前と始めた遺骨問題は必ずやり遂げる。集会の場には必ずお前の席を確保しておくから、タダで入ってこい。いつまでも俺らといっしょに歩け、福留ノリアキ! 俺はお前を勝手に眠らせない!!

福留範昭さんを想う 太平洋戦争被害者補償推進協議会会員一同

タバコとコーヒーが好きな人
必要な話は忌憚なく言う人
涙が多く正義感の強い人
韓国語が上手で、被害者たちと直接話することができる人
被害者たちの痛みを心に刻む人
家族がない遺族たちの痛みと、遺骨を返してもらおうことが出来ない犠牲者家族の苦痛に胸を痛めた人
何よりも「日帝強制占領下強制動員真相究明特別法」の通過を最も喜び、大きな関心を持った人であったと思います。

私が福留範昭さんに初めて会ったのは一九

九三年の秋です。広島で活動される方々が韓国に訪問した時、福留範昭さんが通訳をなさったと記憶しています。

その後、広島県教職員労働組合、広島部落解放同盟の方たちと元「慰安婦」のハルモニたちとの出会いが続きながら、福留さんは広島と被害者たちを繋ぐ役割をなさいました。そして何回もハルモニたちの証言集会が行われ、キムチ教室も行われながら広島で活動する女性たちとの活発な交流が成り立ちました。

韓国の食文化を通じた交流会は、毎回非常に楽しく充実した席でした。行事に参加した人々の反応も良かったし、お互いの心を伝え合うのにも効果的でした。そのような行事の準備には

いつも福留さんの努力と細心の配慮がありました。今思えば韓国文化を理解し好む福留さんがいなかったとすれば、あのような良い行事は成り立たなかったと思います。

福留さんは広島を離れて福岡へと移ったあとから、「日帝強制動員特別法」のための活動の延長線上で証言集会を通じて被害者と遺族たちの声を直接日本の国民に伝える契機を作ろうとしました。当時遺族たちが話した主な内容は、被害者の「遺骨問題」と日本政府が所持している「強制動員被害資料問題」でした。

二〇〇四年二月「日帝強制占領下強制動員被害者真相究明法」の通過を契機に、福留さんは日本で永らく研究し活動してこられた方々を一つにまとめる役割をしなければならぬと悩み、その実現のために努力されました。その成果で二〇〇五年七月に東京のYMCAホテルで行われた真相究明ネットワーク結成大会の開催であり、福留さんだけでなく多くの人々が大きな希望とやりがいを感じたことを思い出します。

福留さんは韓国に来るときまってインターネットが接続出来る宿舎に泊まり、滞在中も一晩中日本語を韓国語に、韓国語を日本語に翻訳しながらこの問題に関心がある方々にニュー

スレターを送る仕事をしました。事務局長の役割にやりがいを持ち、いつも情熱的でした。

被害者の立場から忘れることのできない大切な人でした。

いつも仕事場にタバコとコーヒーをたくさんおいて、仕事中毒のように熱心だった日本人
日本の人々の中で最もたくさん対話をした人

被害者たちのすぐ側で理解した人

共に泣いて笑った人

本当に大切な人

会いたい人

福留氏に会った被害者たちはみな、会いたくてなつかしい、そして助けになろうと絶えず努力した人として福留さんを記憶するでしょう。

私たちの遺族たちはそのような福留さんの記憶を胸に抱いて、生前彼が成し遂げようとし、遺族もまた切実に望む遺骨収集問題と現場調査、資料公開問題を皆さんと共に解決していきたいと思っています。福留さんが活動してこられたこの場が、より発展し希望の灯になることを願います。

彼が私たちに残した情熱と温もりがより一層懐かしくなる初冬夕方に

< 福留範昭著作目録 >

福留さんが書かれたもの的一端をご紹介します。友人の巨明志さんが作成してくださったものです。

【翻訳書】

1984 崔吉城・著 / 福留範昭・訳 『韓国のシャーマン』 国文社

【翻訳論文】

2007 日帝強占下強制動員被害者真相究明委員会の調査を通してみた労務動員(特集 朝鮮人強制連行)(鄭惠瓊・著 / 福留範昭・訳), 『戦争責任研究』(55), p24-p30

2010 過去事問題の認識と責任論(特集 なぜ今、韓国併合が問題となるのか)(金 敏哲・著 / 福留範昭・訳), 『戦争責任研究』(67), p30-34

【共著書】

内海愛子・福留範昭・上杉聰 2007 『遺骨の戦後??朝鮮人強制動員と日本??』岩波書店

【論文】

? 濟州島・加波島における家族と祭儀
? トゥングースの世界観

1984 「韓国のシャーマン」崔吉城・著
『宗教研究』58(2), p246-p250

1990 日常性の中の差別と排除 中国人留学生差別事件を通して , 『解放社会学研究4』日本解放社会学会, p159-p171

1991 韓国のシャーマニズムと治療儀礼 (なぜ今, 医療人類学が 特集), 『教育と医学』39(4), p353-p359

1997 軍隊慰安婦と公娼制度??韓国人・元軍隊慰安婦の証言をもとに??, 『部落解放研究』VOL.3 p96-p119 広島部落解放研究所

2005a 戦後補償問題における運動と記憶 : 壱岐芦辺町朝鮮人海難事故をめぐる (共著者・亘 明志), 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』3(1), p33-p39

2005b 「強制動員真相究明ネットワークの設立にあたって (特集 戦後 60 年), 『戦争責任研究』(49), p38-p46

2005c 強制動員真相究明をめぐる日韓の動き (特集 もうひとつの 韓流), 『インパクション』(149), p26-p37

2006a 戦後補償問題における運動と記憶 : 強制動員被害者の遺骨調査をめぐる (共著者・亘 明志), 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』4(1), p17-p25

2006b 朝鮮人強制動員犠牲者の遺族の声を聴く 韓国・朝鮮の遺族とともに 遺骨問題の解決へ 2006 夏, 『戦争責任研究』(54), p59-p63

2006c 朝鮮人強制動員の真相究明と和解

に向けて 福岡県 (特集 地域としてのアジア) (地域の中のアジア), 『月刊自治研』48(565), p55-p60

2006d 韓国の強制動員被害者の真相究明 (人権キーワード 2006) (1-12 月), 『部落解放』(567), p156-p159

2008a 戦後補償問題における運動と記憶 : 強制動員被害者の遺骨返還, 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』6(1), p17-p23

2008b 韓国の「強制動員犠牲者支援法」について, 『戦争責任研究』(60), p84-p89

2009a 非徴用者の遺骨の処遇も課題に朝鮮人強制動員犠牲者の遺骨について, 『部落解放』(611), p96-p101

2009b 韓国における過去清算の推進と抵抗 強制動員問題を中心に, 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』7(1), p29-p34

2009c 日帝強占下強制動員被害真相究明委員会主催ワークショップ 日本に残された朝鮮人労働者の遺骨 (上), 『統一評論』(526), p56-p65

2009d 日帝強占下強制動員被害真相究明委員会主催ワークショップ 日本に残された朝鮮人労働者の遺骨 (下), 『統一評論』(527), p56-p61

2010 韓国における過去清算の推進と抵抗 韓国マスコミの報道を通して, 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』8(1), p11-p18

在韓被爆者と強制動員真相糾明の接点

市場淳子（韓国原爆被害者を救援する市民の会）

広島・長崎へのアメリカ軍による原爆投下で被害を受けた朝鮮半島出身者は約7万人と推定されている。総被爆者数69万人の1割を超える数である。これほどまでに多くの朝鮮人が異国の地で原爆被害に遭わなければならなかった原因は日本の朝鮮植民地支配にある。人類史上初の核兵器使用の標的にされた広島・長崎は、無辜の平和な都市ではなかった。広島には日清・日露・日中戦争へと兵を送り出した陸軍第5師団が置かれ、東洋工業・三菱重工業を始めとする軍需工場が多数稼働していたし、長崎でも三菱造船所などの軍需工場や炭鉱が数多く稼働しており、それらの施設には多くの朝鮮人が強制動員されていた。また、軍需都市ゆえに働き口の多い両市には、強制動員者の何倍もの人々が、生きる糧を求めて朝鮮半島から移り住んでいたのである。

被爆後、九死に一生を得て祖国に帰還した人は約2万3千人にのぼるが、1965年の日韓基本条約では何の補償もなかった。在韓被爆者は1967年に「韓国原爆被害者協会」を結成し、対日補償請求を開始した。その主要メンバーは広島三菱に強制動員され被爆した元徴用工たちで、在韓被爆者の闘いは、日本政府に原爆被害補償を求めると同時に、三菱に未払い賃金や帰国遭難徴用工の遺骨返還を求める闘いとして展開していくことになる。

以来、40年以上、在韓被爆者は日本政府を相

手に被爆者援護を求める裁判を何件も何件も提訴し、勝訴に勝訴を重ね、数年前からようやく日本の被爆者が受けている援護の8割方を韓国でも受けられるようになった。ただし、日本政府は「人道的立場からの援護である」ことを強調し、植民地支配の責任を認めてはいないし、朝鮮人に強制労働を強い、被爆後も放置した三菱等の強制連行企業にいたっては、何の対応も示していない。

いっぽう、韓国政府は2007年から「国外強制動員犠牲者等支援法」に基づいて、日本による強制動員被害者とその遺族への支援を開始し、祖国帰国途上で遭難した元広島三菱徴用工被爆者の遺族たちにも支援金が支払われた。だが、生きて祖国に戻れた強制動員被爆者には、「日本政府の被爆者援護法による援護策を受けているから」との理由で、上記法律に基づく支援金は支給されていない。また、2009年11月には、韓国政府機関の「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」が、「日本の厚生省と外務省が1983年と1984年に壱岐・対馬で発掘し、埼玉県金乗院に安置されている45柱の遺骨は、広島三菱徴用工被爆者帰国遭難者のものである可能性が高い」という調査結果を発表した。

在韓被爆者問題も、強制動員問題も、今日なお解決のための努力が続いているが、生存被害者はみな90歳近い高齢者である。早期解決のために更なる努力が求められている。

遺族を招いての一連の活動を省みて

小林久公

1. はじめに

5月4日夕刻のことでした、旧陸軍浅茅野飛行場建設工事犠牲者の遺骨発掘で私は猿払村にいました。そこに福留さんから電話があり、韓国から戻ったこと、食あたりで体調が良くないこと、

遺族招へい企画のための全国連絡会会議を5月中旬頃に関くことなどを話し合いました。その翌日に、花房さんから訃報を受取ったのでした。

2. 集会の概要

福留さんの遺志を継ぐかたちで、私たちは、韓国の「太平洋戦争被害者補償推進協議会」とともに10月7日に衆議院議員会館で「韓国・朝鮮の遺族とともに―遺骨問題の解決を!第三回証言集会」を開くことができました。

集会には、韓国の遺族8人と韓国太平洋戦争被害者補償推進協議会のスタッフ3名、日本側は国会議員5名、秘書15名と市民80名が集まりました。韓国の政府機関である「強制動員被害調査・支援委員会」から集会の成功を願うメッセージも送られてきました。集会は、「国は責任を認め、国の責任において遺骨問題を解決することを政府に求める」決議文を採択して終わりました。

翌8日は、採択された「決議文」と「要望書」、「遺族の証言資料集」を持って民主党幹事長室、外務省、厚生労働省、内閣府を訪れ遺族とともに政府折衝を行いました。

その後、遺族は、札幌、東京二ヶ所、神戸、大阪、京都、福岡の全国七箇所で開催された証言集会に参加され、市民の交流を深めました。そこでは強制動員が過去の事実にとどまらず、現在の問題であること。強制動員によって父を失った遺族の体験、貧困、家族の崩壊などで、十分な教育を受けられず、多くの苦労に遇って、現在も恨(ハン)を抱いて生きていることが語られ、強制動員の悲惨さが二世の生活に及んでいる事実が知らされました。

3. 全国連絡会発足の経緯

「韓国・朝鮮の遺族とともに―遺骨問題の解決へ―全国連絡会」は、2006年2月22日、韓国真相究明委員会が来日したさいの懇親会で、強制動員真相究明ネットワークから遺族を招聘して集会を開くことを提案し、出席者の賛同を得たので、その場に居た民団の李鐘太・朴容正、調査団の洪祥進・空野佳弘、真相究明ネットの上杉・福留が相談を持ち、実行委員会をつくること、事務局を真相究明ネットが担当することが了解されました。

結成された「韓国・朝鮮の遺族とともに - 遺骨

問題の解決へ 2006 夏 - 全国実行委員会」は、その年に全国28か所で、23名(うち同伴者5名)の遺族をお招きして企画を実現しました。

その年の秋に、この2006年の総括を踏まえて、「韓国・朝鮮の遺族とともに 遺骨問題の解決へ」の運動を継続、発展させることを確認し「全国連絡会」が誕生しました。

全国連絡会は、翌2007年7月に高山・神岡、名古屋で全国集会を開催し、以降福留事務局長のもとで祐天寺問題、死亡者調査の実施、国の責任での遺骨奉還など政府折衝を繰返してきました。

4. 今回の企画の総括に関連して

(1) 企画目的との整合性について

福留さん亡き後、関係者の中で全国連絡会の会議を誰がどのような手続きで招集するのかなどのやり取りに時間を費やし、当初予定から三ヶ月遅れて8月5日にやつと第11回会議が開催され企画案がまとまりました。

会議で企画の目的として三点を確認しました。

政府として次の課題となっている民間企業関連の遺骨返還を本格化させる

強制労働者関係文書の政府による情報開示をすすめる

強制労働に関する補償法制定の検討

しかし、企画目的にむけた取組の中で、全国連絡会に意見の不一致がありました。それは、遺骨問題とは何か、何が解決されなければならないかとの認識の相違でした。

それは、未だ一体の遺骨も帰せない状況にある日韓両国政府が進めている遺骨調査と返還問題を主に解決すべき遺骨問題と考えるか、記録の無い遺族、遺骨の無い遺族の問題も包含して解決の必要な遺骨問題と考えるかの相違でした。

もう一つは、企画の軸を「韓国・朝鮮の遺族とともに」に置くか、「遺骨問題の解決へ」に置くかの相違でした。

この意見の相違で自己の主張を固執して譲らない状況が生まれ、事業実施は暗礁に乗り上げかけましたが、多くの人の大人の配慮と協力で何とか無事に着地することができました。

しかし、結果的には企画目的の 番は要望書にまとめられましたが、 番、 番の課題については十分な取組ができませんでした。

その結果、全国連絡会の主張と韓国の遺族団体「太平洋戦争被害者補償推進協議会」が求める記録の調査と開示を求める主張と、全国連絡会の取組に温度差が生まれました。実際的に、来日した遺族たちは、現在政府が進めている遺骨調査の対象には含まれない人たちでした。

福留さんの企画案は、「強制動員が過去の事実にとまらず、現在の問題であることを日本の市民に理解してもらうために、強制動員被害者の遺族の中で、強制動員によって父を失った遺族の体験を聞く集会を開きます。強制動員被害者の遺家族、特に父親を失った遺族たちは、貧困、家族の崩壊などで、十分な教育を受けられず、多くの苦労に遇って、現在も恨(ハン)を抱いて生きています。

日本の市民に、証言集会や交流会で彼らの生の声を聞いてもらい、強制動員の悲惨さが二世の生活に及んでいる事実を知らせ、強制動員の事実により目をむけさせることが行事の主要な目的です。また、日本人に自らの体験を語り、交流会などで接することによって、遺族の恨を少しでも解くことも目的の一つです。」と述べていました。この企画目的は、全国七箇所で開催された地方集会が果たしてくれました。



(2) 私たちが、この取組をとおして政府に要望した内容は、次のようなものでした。

国は、強制動員の責任を認め、国の責任において遺骨問題を解決すること。

政府が強制動員被害者の死亡調査を全般的に実施すること、強制動員・強制労働関係資料を調査し全面開示をすること。

韓国で既に遺族が見つまっている42体について、日本政府の責任において、早急な奉還を実現すること。

朝鮮民主主義人民共和国を本籍とする遺骨についても、人道的立場で赤十字などを介して、共和国政府に遺族調査をお願いし、遺骨奉還に着手すること。

旧日本兵の遺骨収集にあたり、その中に朝鮮人、台湾人、現地人などが含まれていることに留意した遺骨収集を行うこと。また、千鳥が淵墓苑に納骨されている戦没者遺骨に、朝鮮人、台湾人の遺骨が含まれて安置されていることを銘記すること。

日本に残されている遺骨の状況は多種多様であり、その遺骨の状況に応じた解決策が必要なので、その遺骨がおかれている状況に応じて、関係する宗教界、市民団体、企業、自治体など、関係者と協議して政府は問題解決を行うこと。

(3) この要望に対する政府の答弁は以下のものでした。

民主党幹事長室 本多平直副幹事長

「遠くから来ていただき申し訳ない。政権が変わって1年。菅内閣の下で本格的に政策をすすめていく。今日、きかせていただいた内容についても受止めていく。長い間解決していないことは申し訳ないと思います。しっかりと岡田幹事長に伝えたいと思います。岡田幹事長も納得することです。岡田幹事長から政府にしっかり

り言うことになると思います。時間を、いつまでも先延ばしして良い問題ではありません。しっかり伝えますので」

外務省 菊田真紀子 政務官

「お話しは前原大臣にも報告したい。今野東議員や民主党から、皆さんにお会いするようにお話が来た。今年は、100年の年で節目の年で。菅総理談話に示されている通り、日本政府としては、歴史に目をそらすことなく、日韓関係を築いていく。ご遺族の方々が、長い間苦勞され、こういう活動に取り組まれていることに敬意を表します。これまでの施策が、必ずしもみなさんのお気持ちにかなうものではなかった。皆様のお話は、私の胸に深くつきさりました。」

厚生労働省 岡本充功 政務官

「要望書のうち厚生労働省に係る項目について回答します。担当の役所の方から聞きましたが、朝鮮人の動員は二つに分類される。一つは、徴兵で軍人などの動員、もう一つは徴用で労働者の動員。その調査がどうなっているかを聞いたところです。海外での遺骨収集については、日本人以外の遺骨が収集されたという記録は無いが、朝鮮人など外国人と判明したものについては、関係国政府に通報するなどの扱いをしている。千鳥が淵については、身元不明の戦没者の遺骨と表示しており、日本人とは言っていない。遺骨返還は、これまでも返還してきている。遺骨に関する情報、強制動員の名簿類は全て韓国政府に渡している。」

内閣府 大臣政務官秘書官 菅 豪 (阿久津議員担当秘書官)

硫黄島出張で政務官不在のため秘書官に、硫黄島の遺骨収集にあたり、朝鮮人の遺骨も含まれていることを特に留意するように要請するにとどめました。

(4) わたしの総括

政府折衝を通して、見えてきたものは政権交替があり、菅総理談話が出されているにもかかわらず過去問題に関して政府に大きな変化は無いということでした。言葉では、幹事長室、外務省が、これまでと違う心のこもった良い言葉を述べてくれました。しかし、実際に遺骨問題の事務を担当している厚生労働省は、役人の言葉を鵜呑みにして答弁でした。

私たちが、2006年に政府に要望したのは次のようなものでした。

朝鮮人の労働動員は、1939年7月4日の閣議決定以来、日本政府の責任において実行されたものであり、その結果戦後60年以上にわたり遺骨の返還はおろか死亡通知さえない遺族が、韓国・朝鮮に多数生じている。政府はその責任を自覚するとともに、遺族の悲痛な思いに応え、一体でも多くの遺骨の所在とともに、死亡にいたる経過、また遺骨が日本に残留した経緯などの調査を、人道上の見地から誠意をもって真剣に進めることを表明していただきたい。遺骨の返還方法については、日本政府と韓国・朝鮮政府の仲介によって、遺骨の保管者の手から遺族へ直接お返しすることを原則とし、その際、遺族への経過説明(わかる限りの死亡理由・経過と遺骨の保管経緯)とともに、遺族の思いを思いとし、日本政府よりのお詫びの表明を願いたい。遺骨奉還に際して遺族が日本へ渡航を希望する場合、また帰国後故郷で遺族が葬祭をとり行うことについては、日本政府から人道上、誠意ある負担をお願いしたい。

私たちは、4年を経てまた同じ内容の要望を繰り返していたのです。すなわち、私たちは、4年間の努力はありますが成果をあげていないことが明らかです。いま私たちは何をしてきたかの反省が必要です。

遺骨問題が解決しない根本原因は、わが国政府が強制動員の責任を認め、国の責任において解決する立場に立っていないところにあります。菅

総理談話が出された今日も政府の姿勢は変わっていません。考えてみれば、この4年間の国会で強制動員の国の責任を明確にさせる質疑はありませんでした。私たちは、そのような質疑を政治家にきちんと求めていなかったのではないのでしょうか。

遺骨問題について「一体でも多く、一日でも早く」との政府答弁は得ていましたが、国の責任については、あまりにも明確なことであり問う必要の無いものとして安易に考えていた面があります。

もう一つの面は、2006年の時から「遺骨の返還はおろか死亡通知さえない遺族が、韓国・朝鮮に多数生じている。政府はその責任を自覚するとともに、遺族の悲痛な思いに応え、一体でも多くの遺骨の所在とともに、死亡にいたる経過、また遺骨が日本に残留した経緯などの調査を、人道上の見地から誠意をもって真剣に進めること」を求めていましたが、そのことの過少評価がありました。

この4年間で、仏教界などの努力により遺族にたどり着ける遺骨は少ないことなど遺骨の実態も明らかになりつつありますが、その解決方法は一つも見えていません。遺族が見つかった遺骨の奉還の目途も立っていません。

この4年の間に祐天寺の軍人軍属遺骨奉還問題が浮上し、その対応に時間を取られた面もありますが、遺骨問題と真相究明と責任の所在を明らかにする事業が十分な成果をあげていないことは明らかです。私たちは今後、政府に対し、強制動員の責任を明確にし、強制動員の真相究明と死亡者調査などの実態調査を実施することに全力をあげて求めなければなりません。それなしに、わが国社会が良くなるはずがありません。

5. 日本政府の遺骨問題の取扱いの現状

(1) 祐天寺の朝鮮人軍人軍属の遺骨

これまで祐天寺に1,135体の朝鮮人軍人軍属の遺骨が保管されていました。そのうち韓国籍の遺骨は、2008年1月以来四回にわたっ

て合計423体(うち195体が身元不明遺骨)が奉還され、現在祐天寺に残されているのは、浮島丸関係の遺骨280体と北朝鮮籍の431体です。

- (2) 厚生労働省人道調査室の民間労働者の遺骨
強制動員労働者の遺骨問題を担当している厚生労働省人道調査室が集めた遺骨情報は、現在2,662件の情報があり、そのうち遺骨の無いものが約300件、合葬などされ個別性のないものが約千件もあり身元が確認できる件数はきわめて少ない。奉還可能な遺骨のうち韓国で42体の遺族が見つまっているが、日本政府の責任が曖昧で奉還のめどが立っていない。
- (3) 厚生労働省が所管している朝鮮人労働者の遺骨131体分が、埼玉県所沢市の金乗院に仮安置されている。それは、戦後に船で朝鮮半島に帰ろうとして遭難した朝鮮人徴用者の遺骨とされており、合葬状態で16個の箱に収められている。
- (4) 政府は、朝鮮人の「埋葬・火葬認許証」5,600人分を82の地方自治体から収集し、韓国政府に提供しているが、政府は、その死亡者の遺骨調査を行っていない。
- (5) 日本政府は、終戦直後までは朝鮮人戦没者の遺族に死亡通知を行ってきたが、GHQ指令で個別通知が困難となり、今日まで個別の遺族への死亡通知を行っていない。

6. おわりに

10月8日に各省訪問も終わり一息ついたところで、来日遺族の政府折衝の感想を聞く場ができました。「外務省がとても良かったので、次の厚生労働省にも大きな期待をしたが、さみしい思いをした」「私たちが望んでいる回答を得られなかった、それが悔しく心が痛い」「日本には、生死を探す義務がある。一日も早く記録が戻るようにして欲しい」「日本に真相究明機関ができることを望んでいる」「私たちの証言資料集を渡せたことはよかった」「福留は私たちの仲間だった。福留が残した偉業をつないでくれている」などなど、

そして皆が福留さんの名を口にし回想する場になりました。

今回の遺族を招いての企画は、日本の歴史問題を解決するために福留さんが考えぬいたうえでの企画でした。彼は、歴史問題の解決に被害の当事者である体験者、遺族を抜きにしてはならないこと繰り返し強調していました。

私は、この事業をそれなりに終えて、彼が遺族とともに何をなそうとしていたのかが改めて分かりかけています。それは朝鮮の風土、風習、文化を理解し、遺族とともに心を通わせてきた福留氏ならではの発想と企画だったと思います。

この企画の実現のために多くの方々が協力さ

れ尽力くださいました。予算を上回る賛同金も寄せられ赤字になることも無く終わることができました。この場を借りて御礼申し上げます。しかし、私たちはこの四年間をかけてもまだ政府に強制労働動員の責任を認めさせられないでいます。遺族の心は満たされないままです。それは全国連絡会に残され大きな課題と言えます。

(2010/11/21)

2010.8.22 日韓市民共同宣言大会報告

「韓国強制併合 100 年共同行動」日本実行委員会 事務局 矢野秀喜

8月22日、東京・豊島公会堂で「日韓市民共同宣言大会」が開催され、「植民地主義の清算と平和実現のための日韓市民共同宣言」が採択されました。この日、会場の外では集会に反対する右翼が街宣車などで妨害活動を行いましたが、会場には1000人ももの市民が集い、講演や被害当事者等の証言に耳を傾け、植民地主義清算に向けての決意を新たにしました。

《日韓両実行委員会代表のあいさつ》

大会の冒頭、日韓両実行委員会の各代表が挨拶をしました。日本実行委員会の伊藤成彦共同代表は、8月10日に出された菅首相談話について「併合条約強制の非を認めれば、どのように反省・謝罪しても、それは空言に過ぎない」と批判し、「『日韓市民共同宣言』は私たちの今後の活動の出発点であり、指針」と訴えました。韓国の李離和（イ・イファ）共同代表は、「植民地主義を清算することは、東アジアの平和共同体をつくる近道」と言い、そのために「宣言と行動計画を具体化させ、地域間の市民運動の連帯を強化する道」を模索していくべき、と応

えられました。

《基調講演》

基調講演は、宋連玉（ソン・ヨノク）さん（青山学院大学教員）と庵途由香さん（立命館大学教員）のお二人。宋さんは、「韓国併合100年に当たり、1945年で歴史が真逆に変わったのではなく、連続した100年として視ることが重要であり、国民国家を超える視点が必要」と言われ、「朝鮮半島の平和と民主主義は日本の平和と民主主義に深く関係していることを認識しないと、植民地主義の克服はおろか、真の連帯も実現しない」と結論づけられました。続いて庵途さんは、「自分の加害性だけを見つめていくのは本当に苦しい作業」であることを確認しつつ、「『責任論』に押しつぶされず、これと向き合うためには、あたりまえのことだが、韓国や朝鮮民主主義人民共和国に住む人々や在日朝鮮人と顔と顔の見える関係をつくっていくしかない」と報告されました。そして、併合100年に当たって、日韓の市民が共同して「市民宣言大会」を開催することの意義を強調され

ました。

《青年・学生宣言》

お二人の基調講演の後、青年・学生が、「植民地主義は現代を生きる私自身の問題である」との宣言を読み上げました。「植民地主義や民族差別の根強い社会を構成し、存続させているのは現在の私たちにほかならない」、「いま、私たちが植民地主義に対して『NO!』を突きつけなければ、植民地主義は再生産されつづけていく」との認識に立って、植民地主義を清算していく課題が「私自身」に課せられており、それを引き受けていくとの決意を力強く表明したのです。

《被害当事者等の証言》

続いて、植民地犯罪の被害当事者等の証言。元日本軍「慰安婦」の朴順姫（パク・スニ）さん、麻生鉦業（赤坂炭鉦）に強制動員された孔在洙（コン・ジェス）さん、金浦市サハリン同胞会の朴魯栄（パク・ノヨン）さん、在日の崔善愛（チェ・ソンエ）さん（ピアニスト）、高英載（コ・ヨンジェ）さん（東京朝鮮中高級学校生徒）がそれぞれの被害体験等を語られ、西澤清さん（東京朝鮮人強制連行真相調査団）、高橋伸子さん（関東大震災時の朝鮮人虐殺の真相を解明し名誉回復を求める市民の会）、北川広和さん（日朝国交正常化連絡会）は、東京大空襲時の朝鮮人被害、関東大震災時朝鮮人虐殺の真相について報告し、日朝国交正常化を急ぐべきと提起されました。集会参加者は、「日本政府の謝罪と賠償がなければ目を瞑ることはできない」（朴順姫さん）、「逃亡して捕まると殴打され、拷問にあった」（孔在洙さん）、「日本政府は未払い賃金、貯金・債券をもとにサハリン韓人同胞特別支援基金を設立すべき」等の証言に耳を傾け、深く心に刻みました。また、「同じ権利を持った人間として学びたい。そんな普通のこと、いつか朝鮮学校に通う学生たちにとっても当たり前のことになるように、青春の一秒一秒の全てを注ぎ、今回の高校無償化

問題を解決し、希望に満ちた未来を掴みとってみせます」との朝鮮高校生・高英載さんの訴え・決意表明は多くの参加者の心を動かしました。

《沢知恵コンサート》

被害当事者等の証言のあとは、沢知恵さんのコンサート。沢さんは、「アメイジンググレイス」「こころ」「死んだ男の残したものは」「朝霧」などを歌いました。その歌声は、植民地主義の清算のために闘おうという市民を励まし、その心に深くしみとおるものでした。

《日韓市民共同宣言の採択》

そして、沢知恵さんのコンサートの後、集会はクライマックスを迎え、学生、青年らによって「植民地主義清算と平和実現のための日韓市民共同宣言」が読み上げられました。「宣言」は長文で、全てを読み上げることができないため、「前文」、「五 東アジアの平和な未来を築くために」と「行動計画」が読み上げられ、満場の拍手で確認・採択されました。行動計画には、日本軍「慰安婦」、強制動員被害者等への補償、高校無償化の朝鮮学校への適用など 20 項目にのぼる日本政府への要求を明記するとともに、「宣言」に対する賛同を広げていくこと、補償立法実現に向けて行動していくこと、日韓市民の連帯活動を強化していくこと等の行動計画を打ち出しました。

以上のように、8.22 日韓市民共同宣言大会は大きく成功しました。その意義を再確認すると以下の 3 点にまとめられます。第 1 は、強制併合 100 年に当たって日韓の市民が、「植民地主義の清算」と「平和実現」を目標に掲げ、共同行動を推進するとともに、議論を重ねて、一つの「日韓市民共同宣言」をまとめあげ、今後の共同行動計画をも確認しあったことです。時間的制約がある中で、歴史認識、南北分断についての評価、植民地主義清算の課題等をめぐる相違などを乗り越え、「宣言」を一本化し、日韓双方の大会で採択するところまでこぎつけた

ことは大きな意味がありました。

第2は、1000人の市民に参加していただき、大きな盛り上がりの中で大会を開催できたことです。戦後補償実現のための運動、政治犯救援、民主化闘争支援などの闘いを担われ、また日韓・日朝連帯の運動を続けてこられた方がたなど本当に多くの市民が大会に参加され、植民地主義の清算のために引き続き運動を進めていくことを確認されました。

第3は、多くの青年・学生が大会に参加し、『映像で観る「韓国強制併合」100年』(スライド)制作、「青年・学生宣言」の作成・発表、そして「日韓市民共同宣言」の朗読など積極的に役割を担ってくれたことです。「現在まで積み残されてきた課題を解決できるのは、今を生きる私たち以外には存在しない」との決意の披瀝は、私たちの運動の未来を指し示すものとなりました。

今後は、日韓市民が共同で作成し、採択した「共同宣言」を実行していかなければなりません。1年近い時間をかけて、日韓の多くの市民

団体・個人が共同して準備・組織して市民宣言大会を開催・成功させる中で、連帯感は深まりました。これを礎とし、今後は植民地主義清算の運動をいっそう強化していくことが問われています。



強制動員真相究明ネットワーク関連 年表

年月日	事項
1999.08.10	「国立国会図書館法の一部を改正する法律案」を衆議院に上程 (賛成議員118名)
2000.11.29	「朝鮮人労務者等の未払金供託に関する質問主意書」 福島瑞穂議員提出
2001.10.12	韓国「日帝強占下強制動員被害真相糾明等に関する特別法案」を韓国国会に発議
2002.11.29	「朝鮮人強制連行・強制労働に関する質問主意書」 近藤昭一議員提出
2004.02.13	韓国、特別法案が韓国国会本会議で可決
11.10	韓国「日帝強占下強制動員被害真相究明委員会」設立
12.02	「朝鮮人労務者等に対する未払金その他の取扱いに関する質問主意書」 福島瑞穂議員提出
12.17	日韓首脳会談で、盧武鉉大統領が小泉首相に強制動員労働者の遺骨返還に協力を求める
2005.02.01	韓国 強制動員被害申告受付開始
02.17	真相糾明委員会代表団 日本の国会訪問
03.15	「朝鮮人の未払い金問題について」 福島瑞穂議員 参議院厚生労働委員会 質疑
04.20	真相糾明委員会 調査班初めての日本実地調査 (筑豊・宇部、筑豊・ウトロなど)
.4月	日本政府 108 の企業へ遺骨情報提供依頼
05.03	強制動員真相究明ネットワーク設立準備会 於:神戸学生青年センター